



大阪学入門



片 木 淳

(大阪府総務部長)

三〇数年ぶりに故郷大阪に戻り、その住心地、居心地のよさをあらためて痛感している。

まず、いろんな小売店、飲食店の店員の態度が実によい。東京をはじめ他国では、しばしば客を客とも思わぬ横柄な態度、「買うてほしいのか、ほしくないのか」わからんような誠意のなさにはイライラがつのるばかりであっ

の行動は非常にわかりやすく、余計な気づかいをする必要がない点も居心地のよさにつながる。

江戸時代、最高時には四二万人を超えた大阪の人口のうち、武士は、大阪城代、東西両町奉行所あわせて五〇〇人程にすぎず、いないも同然の少なさであった。このような町人の町で大阪商人たちは、自らの才覚だけをたよりに厳しい競争社会を生き抜き、お上を恐れず、規制に従わず、観念よりも現実を、善悪よりも損得を重視する性格を練り上げて来たのである(大谷晃一著「大阪学」)。

さらに、大阪人たちは、天下の台所に物産をもちこんでくる諸国の人々と意志疎通を滑らかにし、商売をスムーズに進めなければならなかった。大阪人は、このため自分を笑ってもらふことにより相手の警戒心を解くという独特の方法を編み出した。大阪人が二人よれば漫才になるといわれる所以である。

小生も、諸国漫遊時代、笑いをとろうという本性が、おりにふれ自然と出てしまい、な

たが、大阪では、「お客さまはあくまで神様」であり、店員が手取り足取り、それこそ痒いところに手が届くようなサービスをしてくれる。

さらに、ありがたいことには、もってくるスピードが速い。大阪人は、「イラチ」だといわれ、万事非常にせっかちである。これも、商人の町で激しい競争にあけくれてきた結果の特性であるが、小生のように年がら年中「さっさとせんか」とイラついている人間にとって、すこぶる精神衛生によい。

ちなみに、大阪人の平均歩行速度は秒速一・六〇メートルで、パリの一・四六メートルを抜いて、堂々世界一だそうである。大阪では、車は信号が青にかわる四・九二秒前に見切り発車する。自慢するようなことではないが、これも、断トツの世界一である。横断歩道で青信号になるのを待つ歩行者は、一〇・五％にすぎない。東京では四七・三％の人がきちんと待つのだそうである。

大阪人は本音の世界で生きているから、そ

にかと誤解を招いたものであるが、大阪では、ノック知事はもちろんのこと、皆、「何が冗談で、何が真面目な話なのか」を識別する高度の能力を有しているので、意志疎通がきわめてスムーズで大いに助かっている。

大阪では人に笑われることは恥でもなんでもない。むしろ「阿呆」になれないようでは人物が小さいと見られる。「阿呆」になれるのは、その人の余裕を示すものであり、「皆にあんなに笑われてもへっちゃらや。ほんまに偉い人やなあ」となるのである。談志のよいうに「おれは偉いんだ」というような笑いは大阪では相手にされない。阿呆の坂田やさんまの腰の低さが受けるのである。

バブル崩壊の後始末と財政難で四苦八苦の大阪府であるが、いずれ一〇年も経たないうちに、以上のような極めて個性的な特色を生かして、東京に対抗する、多極分散型国家の一方の雄として飛躍する日も近いと確信している。